

一番困ったのがハッキリ 言うとトイレなんですよね

水害の経験からわかった、災害用トイレの必要性

2006年7月に日本列島を縦断的に襲った記録的豪雨(七月豪雨)は長野県岡谷市内にも壊滅的な水害をもたらし、主要道路の冠水、土石流災害などを起こした。

駐車場に80cmもの水が溜まった八十二銀行諏訪南支店は、まさに陸の孤島と化し、営業休止を余儀なくされる。当時を同銀行総務部グループ長 黒岩恵一郎氏は振り返る。「一番困ったのが、ハッキリ言うとトイレなんですよね。下水が流れないので、水を流せない。したがってトイレで用がたせない。我慢にも限界がありました。」そこで、トイレが使える所までずぶ濡れになりながら皆で歩いていくことにした。と語る。

「近所のなんとか行ける所に連絡をして、(比較的高い位置にある)道路の中央分離帯まで行って、そこを通過して連絡先に向かったりしました。水かさがかかなりあり、なかには背負わなければ分離帯まで行けない女性行員もいました。女性にしてみればかなりきつい経験なのではなかったかと記憶しています。」



わがまま言えない状況で、どこまでできるか！

基本的に必要不可欠なトイレ。しかしプライバシー面からいうと「恥ずかしい」という意識もある。「もちろん個室などでプライバシーなどが守られることが望ましいのですが、ああいう状況でわがままも言えない中、どこまで出来るかということですね。さすがにトイレがハダカで置かれてて、『さあ、どうぞ』と言われても困ります。だから最低、目隠し。もっと言えば、しっかり囲ったものがあるといい。仮に段ボールと言えども、囲われた箱があるということに安心感を覚えます。」

災害時に見落とされがちな「プライバシー」にも配慮が行き届く。経験したからこそできる「備え」の心得を教えてくださいました。

Interview



株式会社八十二銀行
総務部グループ長
黒岩 恵一郎 様

「災害には、地域の中で協力しなければ出来ないことは率先して協力していきたい。地域金融期間の使命・責任だと思っています。」